

注(4) 霊屋橋の直ぐ上流の淵

資料 国民百科大辞典第7巻(富山房)

113 「荒城の月」はどの詩集の中にあるのか

問 「荒城の月」は、晩翠の詩集のどれに載っているのでしょうか。どうしても見つかりません。

答 「荒城の月」が載っている晩翠自著の詩集には、「晩翠詩抄」(岩波文庫本、昭和5)と「自選詩抄」(昭和17)とがあります。

「晩翠放談」(土井晩翠、昭和23)に『東京音楽学校が中等唱歌集の編纂を企て、当時の文士にそれぞれ出題して先づ作詞を求めた。私にあてられたのは他の2編と共に「荒城の月」であった。この題を与へられて先づ第一に思ひ出したのは会津若松の鶴ヶ城……私の故郷の仙台の青葉城……この名城も作詞の材料を供したことはいふ迄もない。……この作詞を音楽学校が採用して作曲を滝君に依頼したものと見える。』とあるように、明治32年、晩翠29才の作品であります。やがて明治34年3月30日「中学唱歌」⁽²⁾が発行されますが、収録作品の作詞者名・作曲者名は記さず、「東京音楽学校蔵版」と明示して著作権を音楽学校一本に帰属させています。一世を挙げて愛唱され、永く唱い継がれる不朽の名作「荒城の月」の歌詞を、その後出版する自著の中に採り入れることをしなかったのは、そのためであります。その後時は経過し、昭和5年6月岩波文庫本「晩翠詩抄」を世に送ります。その中の「天地有情」(第一詩集、明治32)の30年前に本来ならば入れるべかりし本文系列の中に「荒城の月」を割り込ませているのです。これに次ぐ「自選詩抄」(昭和17)にも、勿論「荒城の月」をとり入れてあります。

注(1) 明治12年、音楽教育の調査研究と教員養成のために文部省内に「音楽取調掛」が設置されたのに始まり、翌年から「伝習生」を入れて教育を開始した。明治18年には「音楽取調所」と改称され、20年には東京音楽学校となり、その発展は順調であるかに見えたが、明治24年になって突然廃校の危機に立たされた。帝国議会での予算審議の際に、財政難を理由とする廃止論議が起ったのである。関係者の努力で漸く廃校は免れたものの、26年には高等師範学校の附属に移されてしまい、再び独立校となるには明治32年をまたねばならなかった。中学唱歌の編纂が始まったのは、独立した明治32年と考えるのが至当である。わが国音楽教育の中心として幾多の傑出した音楽家を生み、昭和24年東京美術学校と合体して東京芸術大学に昇格した、音楽学部はその後身である。

注(2) 滝廉太郎。明治時代の天才的作曲家・ピアノ奏者。明治12年8月24日東京市芝区南佐

久町2丁目18番地に生れた。同24年13才の12月、一家と共に大分県竹田に移り、27年16才の5月には上京した。彼の竹田在住は後にも先にもこの2年半足らずの期間に過ぎなかった。巷間一般に伝えられていることで彼を竹田市の生れとするのは誤りである。地元竹田市では、彼を「郷友」と呼んでおり、一般には第二の故郷だとするものがあるのはそのためである。高等師範学校附属音楽学校を卒業。明治32年21才の若さで母校助教授に任ぜられた。彼は今もなお広く愛唱されている「花」を含む「四季」や「荒城の月」等作曲して、日本の芸術歌曲を創始したほか、ピアノ奏者としてもすぐれた技倆を示した。明治34年文部省の命によりドイツに留学、将来の大成が期待されたが、病気のため翌年秋帰国、大分市稲荷町339番地（現府内町）の父母の許で療養に努めたが、遂にその甲斐なく、翌36年6月29日25才の若さで世を去った。なお「荒城の月」の作曲地を、竹田市の岡城址だったと書かれているものを見受ける〔晩翠も「晩翠放談」の中でこのように書いている。「情熱の詩人土井晩翠」（石井昌光）なども同様。〕が、これも尤もらしい誤伝であって、外遊の直前、麴町区上二番町22番地（現千代田区一番町）在住中に作曲されたものである。余りにも短命だった彼の一生を通して、彼と大分との接触も非常に短かった。昭和42年1月18日、仙台市と竹田市とは、滝廉太郎と土井晩翠とのゆかりから、それに長野県中野市〔中山晋平〕を加え、三市間音楽姉妹都市の締結をした。「竹田」は「タケダ」と濁らずに、「タケタ」と澄んで発音するのが正しい。

注③ 東京音楽学校編纂で、明治34年3月30日 共益商社から発行された。濃青色表紙の小型本である。この書は明治後期以後の学校唱歌の普及に大きな役割を果たした。明治の学制の中に唱歌が設けられてから、女子中等学校では唱歌が正課として課せられるようになったが、男子中等学校では殆ど課せられていなかった。明治31年秋、中等学校長会議が開かれた際、唱歌を科目に入れる可否の諮問が文部省から出された。この時参会した校長の有志50余名が、高等師範学校附属音楽学校と中学校とを見学した。矢田部良吉校長が唱歌必須を力説し、両校生徒の合同の唱歌の発表会を催し、見学者に大きな感銘を与えた。当日のプログラムには、日清戦争後ということもあって軍国的なものが多く、唱歌を修身・道徳の教科の一つと考えていたともいえる。こうした教育界の中で、どのような唱歌教科書を用いるべきかの問題が起り、東京音楽学校が中心となり、中等学校用の教材になる唱歌編纂が具体化されたのである。音楽学校では、明治32年頃から広く文学者・教育者・音楽家に作歌・作曲を委嘱し100余種を集めた。その一方歌詞だけを一般に公表して作曲を募集した。応募については歌詞の選定は自由で一人3種以内としたが、100余種の曲が集った。幸田延〔のぶ〕教授らを中心にした選定委員が、合計2百余種の中から38種を選んで「中学唱歌」として発行したのである。この事情については、その「例言」に次の通り記してある。

例 言

- 一、本書は中学校用に充つる目的を以て編纂せる唱歌集とす。
- 一、本校、曩〔さき〕に是種の唱歌集編纂の必要を認むるや、広く世の文学者、教育家并に音楽家に委嘱して作歌・作曲せしめ、歳月を経て一百有余種を得たりしが、尚その足らざるを補はむが為に更に同一の方法により治〔ひろ〕く材料を内外に求め、新に又一百有余種を集め得たり。茲に於て選定委員を設け前後合せて得たるものの中、現今中学校生徒の実情に参照して最も適切なるべきもの三十八種を精選せしめたるが即ち本編なり。
- 一、本編に用ゐたる曲譜の多数は邦人の序作に係り、其他は泰西作曲家の手に成れるものとす。
- 一、本編は歌曲の程度、題目の種類並に排列の順序等に関して教科書として未だ完全ならざるの点なきを保せずと雖も、之に依りて漸次歩武を進めなば庶幾〔ねがわ〕くは音楽の効果を実現せしむることを得む。

明治三十四年三月

東京音楽学校 渡辺龍聖

目 次

雪中行軍 富士山 運動会 明日は日曜日 朝起の鐘 駒の蹄 牛お
ふ童 旅路の愉快 雲雀 我等は中学一年生 前途万里 占守島 太
平洋 夏やすみ 来れ秋 四季の朝 寄宿の古釣瓶〔つるべ〕
告別 老将軍 武蔵野 松下清水 入船出船 遠別離 馬上の少年
歳暮 壺の碑〔いしぶみ〕 我家 祖先の霊 初旅 箱根八里 荒城
の月 小川の流 甲鉄艦 帰雁 去年今夜 豊太閣 楽しき教場
今は学校後に見て

なおこの曲集のそれぞれの作詞・作曲者の姓名が秘されているので、現在十数の曲以外はわかっていない。従って「荒城の月」には、土井晩翠の名も、滝廉太郎の名も出ていない。

資料 晩翠詩抄（岩波文庫）

滝廉太郎（小長〔こちょう〕久子）